

日本郵船・東京コンテナ・ターミナル見学記

コンテナ・ターミナルなんて、刑事ものか、ヤクザもののテレビ場面でしか見たことがない。しかし、今や海外との物流取引の一大拠点となったコンテナ・ターミナルを一度は見てみたいものだと思っていた矢先、1月31日昼下がりにJN協会による見学会が実施され、松尾理事長から女子立教大生まで27名の会員が参加した。

JR品川駅港南口から貸切バスに乗って約20分、日本郵船・東京コンテナ・ターミナルビルへ到着。会議室で20分間のビデオ観賞による事前研修をすませた後、日本コンテナ・ターミナル社の文谷嘉宏課長の案内で4階レベルの屋上へ出て全景を見ながら説明を受けた。目の前に広がるコンテナ船専用コンテナ・ヤード(総面積 275,400 m²、680m×405m)と二つのバース(停泊場所、水深 15m)を見下ろすと、ヤードには膨大な数のコンテナが整然と留置されている光景が目に入る。丁度ヨーロッパ航路のコンテナ船 N.Y.K.Line アクエリエス号が入港し、7号バースに接岸する刹那だった。

しかし、バースには立ち働く港湾労働者の人影は見えず、本船荷役とヤード・オペレーションはすべてターミナル内のTOPSシステムにより粛々とオペレートされている。かつての波止場や港湾荷役のイメージはまったく感じられない。船上のコンテナは現場労働者の手を煩わすことなく、コンピューター制御によりガントリー・クレーンからトランスファー・クレーンを経て確実にトレーラーまで運ばれる。ここでは極力マンパワーを排除している。聞くとところによれば、入港したあの巨大な7万トン級の船舶でも、2ヶ月間の航海中、僅か20名程度の船員による3交代制で省力化を徹底しているそうだ。

かつては、埠頭は国が管理して入港順に各バースに接岸していたようだが、案外不効率で今では各海運会社が占有バースを管理しながら、自社船舶の荷役業務を行っている。

見学を終え質疑応答を通して気づいたが、ともすると目前にこれだけ巨大な施設を見せられると、つい見たままに現象的で物質的な質問が多くなりがちである。IT化の効用とか、原子力船利用の可能性については質疑がなかったが、どうなのだろう？

海運会社にとっては長〜い冬の時代を潜り抜け、近年になって漸く貿易の拡大、とりわけ中国貿易の発展に伴い飛躍的に物流量が増え、コンテナ・ターミナルの需要も増大して潤っているらしい。その物流のコアである、地道な仕事場に光を照らす、有意義な見学会だった。欲を言えば、作業の中核であるTOPSオペレーションを見学出来れば、見学会に錦上花を添えることが出来たように思う。

(近藤)